戦後新教育期におけるコンピテンシー・ベイスの授業づくり
―愛知学芸大学附属岡崎小学校における生活教育―

行田　臣

一　はじめに

本研究は、愛知学芸大学附属岡崎小学校（現：愛知教育大学附属岡崎小学校、以下、「附属岡崎小学校」と略す）における、戦後新教育期の「生活教育」が、評価や問題解決学習における資質・能力に着目し、継続、深化されたことで、たしかな学び[1]を実現した姿を明らかにすることを目的とする。

戦後新教育期は、カリキュラムを自主編成する自由が教師に与えられ、昭和二〇年代前半を中心に、全国的にコア・カリキュラムや地域教育計画など、様々な実践が展開された。しかし、学力低下などの批判もあり、昭和二〇年代後半になると、取り組みの勢いは衰えていく。その中でも、はいまわりにならない学習を実践していた学校もあったことが金馬国晴によって報告されている[2]。また、金馬は、実践を継続していた兵庫師範学校女子部附属小学校におけるプランの改訂過程をもとに、総合的な学習の時間における課題の一つである、カリキュラムの「固定化」の問題について検討しており、この時期の実践を分析することが、現代の教育における課題を検討するために有効であることを明らかにしている[3]。

そこで、本研究では、生活教育を継続し、深化させていった附属岡崎小学校に注目する。愛知県三河地域において研究の中心的学校であった附属岡崎小学校は、一九四六年に「実験学校」に指定され、三河地域の新教育を推進するための学校となる。三河地域における実験学校の多くは、社会科を中心とした実践に取り組んでいたが、五年間にわたる実験学校の指定が終わると、研究をやめてしまったり、国語や算数などへと研究の中心が移ってしまったりした学校もあった[4]。そのような中、附属岡崎小学校は、評価に力を入れ、生活教育を継続していった。

戦後新教育期においては、アメリカから「教育評価」と

いう考え方が紹介され、「指導と評価の一体化」という教育評価の基本的な考え方の源流を読み取ることができると田中耕治は指摘している。[5]『学習指導要領（試案）』（一九四七年版）では、「指導法が適切であったかどうかを反省することができるし、また、一人一人の児童や青年の学習結果を知って、これからの指導の出発点をはっきりさせたり、その指導計画を考えたりするいとぐちを見つけ出すこともでき、これあって、はじめて指導の効果を、よりいっそう、あげることができる」と、評価の必要性が述べられている。[6]また、教職教養のための教科書『初等教育の原理』では、「教育評価」の特徴が、「評価は児童の生活全体を問題にし、その発展をはかろうとするもの」「教育の結果ばかりでなく、その過程を重視するもの」「教師の行う評価ばかりでなく児童の自己評価をも大事なものとして取り上げる」「結果をいっそう適切な教材の選択や、学習指導法の改善に利用し役だてるためにも行われる」「学習活動を有効ならしめる上に欠くべからざるものである」という五点にまとめられている。[7]当時の評価について、田中は、「今日の教育評価論はその上に何をつけ加えることができるかと自問せざるをえないほどに、（中略）高い見識が成立していた」と評価している。[8]

学校現場においても、一九五二、三年頃まで指導の改善と、発達を援助するための評価の追求が行われており、[9]教育評価に関する著作や論考、実践報告が種々の教育雑誌に登場している。[10]雑誌『カリキュラム』（一九五二年三八号）では、詳細な評価計画をもり込んだ授業計画案「村の製粉工場」（五年生）が示され、個々の子どもの実態に合った評価計画の必要性が述べられている。[11]教育評価の歴史をまとめた天野正輝は、「単元学習の成否のカギは、綿密な評価計画がたてられ実施されるかどうかにあるという認識が徐々に広がってきていた」と指摘している。[12]つまり、昭和二〇年代後半になると教師たちは授業をより良くしていくために評価に力を入れ、実践を行っていたと言える。

本研究が注目する附属岡崎小学校は、一九五〇年から一九五三年にかけて、「新しい学力観に立った学習評価」の研究に取り組んでおり、どのような評価が行われ、実践を充実させていたのか明らかにしたい。[13]

二　戦後新教育期における学習評価

戦後新教育期における学習評価についての先行研究としては、中心となった社会科では、坂井誠亮[14]、林尚示[15]、来山裕[16]などの研究がある。坂井は、奈良県の初期社会科プランである「桜井プラン」（桜井町立桜井小学校・桜井南小学

校・城島小学校）及び、「奈良プラン」（奈良女子高等師範学校附属小学校）、「田原本プラン」（田原本町立田原本小学校）における学習評価及び、評価テスト問題の特質を紹介している。坂井によれば、「桜井プラン」（一九五二年度）では、作業単元の展開例に指導上の留意点と関連させながら、具体的な評価基準が示されていたことが明らかにされている。[17] また、「奈良プラン」では、各教科において「各種能力指導系統表」が示され、能力目標を明確にすることで、評価の基準が具体的になり、綿密で系統的な目標及び評価の体系が「奈良プラン」のたしかな教育を支えていたと指摘している。[18]

林は、「北条プラン」（千葉県館山市立北条小学校）における通信簿や通知表を分析し、学習者の能力評価とコア・カリキュラムの構造変遷との関連に注目して変容過程を明らかにしている。

来山は、一九四七年度版『学習指導要領社会科編（Ⅱ）（試案）』と一九五一年度版『中学校・高等学校学習指導要領社会科編Ⅱ一般編』をL.R.オルランディの目標細目表をもとに分析し、初期社会科は、知識・理解、態度、技能の統一的育成を目指す経験主義社会科であり、目標、学習活動、評価の一貫性を保持しようとしていたことを明らかにしている。[19] また、学習指導要領の評価の理念が現場でどのように反映されたか、藤沢第一中学校及び、広島大学教育学部附属三原中学校の実践をもとに分析している。[20]

以上のように、戦後新教育期における学習評価について、具体的な実践を取り上げた先行研究はあるものの、その数は少なく、十分に報告されているとは言えない。そこで本研究では、史料『生活教育研究』第三集（一九五〇年）～第七集（一九五四年）を用いて、教師達が附属岡崎小学校における「生活教育」をどのように深化させたのかを明らかにする。

三　昭和二十年代後半にける附属岡崎小学校の「生活教育」

附属岡崎小学校は、一九四七年二月に第二十九回初等教育研究発表会を開催し、戦前から続く授業公開を再開した。翌、一九四八年十一月には、「生活教育研究協議会」を開催し、約六百名の参加者を集めた。[21] 尚、当時の学校規模は、在籍児童数四百六十名。[22] 学級数は、各学年二学級ずつの十二学級であった。[23] このことから、児童数よりも多くの参観者を集めるほど注目を集める学校であったことが伺える。同年、『生活計画案綴』、『生活教育研究　第一集』を発行した。翌、一九四九年十一月には、第二回生活教育研

究協議会を開催し、研究の集大成となる『生活学校の姿』、『余暇学習指導計画』、『基礎学習テキストブック』、『単元学習指導計画案』を発行した。これ以後、附属岡崎小学校では、カリキュラムの構成、単元一覧、授業展開が継続され、実践されている。

附属岡崎小学校では、学力を「理解、技能、態度の機能的統合」ととらえており、知識の量より、生きて働く実践知、知識・技能の次元をこえて、態度の次元にまで高めることを目指していた。[24]

一九五〇年の実践記録「役に立つ動物」には、評価に関する記述が見られるようになった（資料Ⅱ参照）。その中身は、「あひるの羽毛などの様子」や「品種改良」、「動物の種類」について理解すること。「図表の表し方」「調査をしたものの整理の仕方」「パノラマ制作の技術」などの技能。「動物を世話する態度」「作業中共同する態度」などを評価している。これは、先行研究で来山が明らかにした初期社会科の評価の特徴と重なるものであった。

一九五二年には、単元の学習過程において、どんな場所で、どんなことがら、どういう角度から、どんなねらいをもって学習させ、体験させるかを明らかにするために、「現場学習」という実験的研究が実践されるようになった。[25]「現場学習」は、生産における工場、消費における市場、交通における駅など、社会における様々な機能または施設を中心とした場で学習することを指す。[26]現場学習は、二年、四年、六年の児童たち合計六名（外向性のある児童で、単元学習能力テストの成績が上、中、下から各二名を抽出し、男女各三名の児童を選出）を対象に行った。児童の様子を観察するため、教師二名、愛知学芸大学の学生八名が参加。児童一人に、大人一人がつき、六名全体を観察する担当が一人、指導者の観察に一人という役割分担が行われた。

現場学習の目標は、「東岡崎駅の模型を作ろうとして駅の見学計画を立てた児童は、本時においてどのような見学をするのか、詳しく観察する」ことであった。実践の結果、児童がどのような活動をしたのか、「学習活動分析表」が作成され、計画を立てる場面、見学をする場面、見学の処理をする場面において、「見る」「聞く」「話す」「書く」「描く（作る）」活動がどのように展開されたのか、子どもの言葉や動作が細かく記録され、まとめられている。さらに、思考力、実践力、企画力など、八つの能力が設定された「学習能力分析表」が作られ、児童の活動が、どのような学習能力に結びつくのか、その関係性が示されている。

例えば、「貨物が沢山あったから貨物ホームを長くし、又天井を高くすると良い」という児童の発言は、貨物の数が多くあることから、ホームの長さや、天井の高さが必要

であると考えている。これは、「相対的関係を考えることができる」力につながり、思考力が働いていると示されている。また、話し合いの際、「そうじゃあない。こうだ。」「そうだ、そうだ」と言う姿は、「結論を出そうと努力する」もので、討議力が働いていると示されている。また、教師の指導についても記録されており、授業を改善する視点も示されている。

一九五三年には、附属岡崎小学校が、戦後一貫して目指してきた、生活の中における課題解決を目指す「生活単元学習」[27]における、問題解決能力の評価の観点として、①事実や資料を解釈する力、②知識や原理を適用する力、③証明を吟味したり評価する力の三つが設定され、目指す資質・能力が明らかにされた[28]。つまり、附属岡崎小学校は、一九五〇年以来、教育評価に力を入れ、学力の育成を目指してきた。その中で、児童の言動と学習能力の関係性に着目することで実践を改善しようとしていったと言え、コンピテンシー・ベースの授業づくりが行われるようになってきたと考えられる。

附属岡崎小学校において、目指す問題解決能力をどのように育ててきたか、実践の具体が表Ⅰのように示されている。表Ⅰに見られるように、単元「役に立つ動物」では、児童が「資料内の関連を把握する」ことができるように、「牛と馬の役立ち方はどう違うか対比的に資料を出す」といった手立てがとられている。また、単元「住まい」では、「結論が立脚している事実や根本を認知する」ことができるように、「穴と穴、筒と筒を対比させ、（中略）観察する際に手順を示す」などの手立てがとられている。そして、それが、「事実や資料を解釈する力」や「証明を吟味したり評価する力」など、問題解決学習において、どの力につながっていくのかが明確に示されている。これにより、一九五〇年の実践では、動物の種類や形態、習性などを理解することが学習の中心であったが、その理解した知識を活用し、役に立つ動物と役に立たない動物に分類をしたり、調べた結果を筋道立てて説明したりするなど、一九五三年の実践は学びが深まったものになっている。

ここまで述べてきたように、戦後新教育期の附属岡崎小学校においては、先行研究で取り上げられてきた明石プランや北条プランとは異り、カリキュラムの構成や単元一覧を改訂せず、問題解決学習において目指す資質・能力を明確にした上で授業づくりを行い、それを評価し、実践を改善することに注力することで、児童の学びを充実させていったことが明らかになった。では、附属岡崎小学校の実践はたしかな学びを児童たちに保障するものであったのか、次節では、ニューマンの「真正の学び」という視点か

ら検討する。

四　ニューマンの「真正の学び」研究

「真正の学び」(authentic acheivement) 研究についてニューマンは、学校再建策が質の高い教授学習活動へと導いているのかどうかを判断するために、「教師や子どもたちの活動を知的側面の質 (intellectual quality) に焦点化し、「知的成果についてのスタンダード (atandard for intellectual accomplishment)」を開発したと述べている。[29]

草原は、ニューマンの「真正の学び」研究は、標準テストでは見取ることができない学力をとらえる指標を示した学力研究であるとする。[30] また、卜部は、有意味で価値のある重要な知的成果を出せような新たな学びの可視化 (標準化) に取り組んだ研究であると指摘する。[31] つまり、ニューマンの「真正の学び」研究は、テストでは見取ることができない知的側面を可視化することができる学力研究であると言える。このことから、戦後新教育期の問題解決学習において課題とされた、学力が身に付かないという指摘に対して、ニューマンの「真正の学び」の基準を用いて実践を評価すれば、児童の知的な学力を保障するたしかな学びを実現していたのか検証することができると考えた。

ニューマンの提唱する「真正の学び」では、「知識の構築(construction of knowledge)、「鍛練された探究(disclined inquiry)」、「学びの学校の外での価値 (value of learning beyond school)」の三つの基準が示されており、その基準全てを満たすことを要求している。[32] つまり、「真正の学び」における三つの基準を満たす実践は、たしかな学びが成立していると言える。

「真正の学び」研究では、それぞれの基準に対し、実践を評価するための、スタンダード (評価課題) が以下のように、七つ示されている。[33]

「知識の構築」

スタンダード①情報の組織化

スタンダード②選択肢 (代替案) の考察

「鍛練された探究」

スタンダード③学問的内容

スタンダード④学問的プロセス

スタンダード⑤卓越した文章による伝達

「学校の外での価値」

スタンダード⑥学校の外の世界と結びついた問題

スタンダード⑦学校外の聴衆

この七つのスタンダードをもとに、一九五三年の単元「役に立つ動物」(資料Ⅱ) を次節では分析していく。

五　「真正の学び」から見た附属岡崎小学校の生活教育

一つ目の基準「知識の構築」は、子どもたちが、口頭での会話や文章作成、有形物の修繕や建設、はたまた芸術的パフォーマンスの中で指導された実践を通して、自らの知識や技術を磨いていく学習である。

「役に立つ動物」では、「知識や原理を適用する力」のうち、「いろいろな分類表を集めて、みんなで一番わかりやすいものを決める」ところに「スタンダード①：情報の組織化」が見られる。ここでは、「役に立つ動物と役に立たぬ動物はどう違うのか」という問題に対処するために、参考書や教科書などから様々な情報を集め、それを評価し、どのように分類したのかを説明するよう教師が求めている。これは、「概念、課題、問題に対処するに当って、複雑な情報を組織化し、統合し、解釈し、説明し、評価することを子どもたちに要求する」学びとなっている。

二つ目の基準「鍛練された探究」は、既存の知識基盤を活用すること、表面的な認識ではなく、深い理解を追求すること、卓越したコミュニケーションを通して自身の考えや発見を表明することの三つの特徴から構成されている。

「役に立つ動物」では、「証明を吟味したり評価したりする力」のうち、「機能加工品を集めて、その中で役立つ動物から加工したものを分類して、今までの研究と合っているか調べたり新事実の発見はないか」考える場面や、「事実や資料を解釈する力」のうち、「動物をどのように利用しているか、農・山・村との違いを絵に描いたり話し合ったりする」場面に「スタンダード③：学問的内容」が見られる。これは、「学問分野や専門職領域の中核と言える考え方や理論、視点についての理解や活用を表現するように子どもたちに要求する」学びとなっていると考えられる。つまり、動物が生活に役に立つのかという視点から様々な動物について分類したり、違いを絵に描いたり話し合ったりすることで、生物学という学問分野の視点から動物について考え、理解を深める学びとなっている。

また、「知識や原理を適用する力」の整理の場面では、画集を作り、分類の道筋が理解されているか確かめるために、調べた結果を発表することを求めている。これは、「スタンダード⑤：卓越した文章による伝達」に合致し、「文章を書く技術を応用することで、子どもたちの理解や説明、結論を巧みに述べるように要求する」学びとなっている。附属岡崎小学校では、発表方法については、言語発表、製作物による発表、図表発表、絵画発表、行動発表、機械器具を使用しての発表など、いろいろな方法が考えられてい

る。そこで重視されているのは、「研究の結論を重ね、その背後に潜んでいる法則性や道筋をつかむようにしなければならない」こととしている。[34] つまり、ただ、児童が自分の研究してきたことを発表するだけではなく、その背後にある法則性などへも目を向けさせ、学びを深いものにしようとしていたことがわかる。

三つ目の基準「学校の外での価値」は、アイデアを伝えようとしたり、生産物を生み出そうとしたりするなど、他者に影響をもたらそうとする学習である。

「役に立つ動物」では、単元全体に「スタンダード⑥：学校の外の世界と結びついた問題」が見られる。役に立つ動物では、どんな動物が人の生活に役立つのかを、人々の生活場所と照らし合わせて考えることによって動物の利用が人々の生活場所によって異ることなどを理解するように授業が設計されている。これは、「教室の外の生活で直面したことのある、または直面するであろう概念や問題、課題と同じものを子どもたちに触れさせ、これらに対処することを要求する」学びとなっている。

ここまで述べたように、附属岡崎小学校における「役に立つ動物」では、七つのスタンダードのうち、四つを満たしていることが明らかになった。さらに、そのスタンダードは、「知識の構築」、「鍛練された探究」、「学校の外での価値」という三つの基準に含まれるものであり、バランスがとれた実践が展開されていたと言える。以上のことから、附属岡崎小学校の実践はたしかな学びが展開されていたと言えるのではないだろうか。

しかし、スタンダード②の問題に対処するに当って、選択肢（代替案）となる解決案を考察する活動や、スタンダード④の探究、調査、伝達の手法を活用すること、スタンダード⑦学校の外にいる聴衆に向けて伝達したり、何らかの行動をとるようなことは行われていない。つまり、より充実した学習にするための課題も残されていると言える。

六　おわりに

本研究では、昭和二十年代後半における附属岡崎小学校の生活教育が評価や問題解決能力として目指す資質・能力の育成に焦点を当て、実践を継続し、充実させていったことを明らかにした。そこで展開された学びは、現代の「真正の学び」という視点から見ても価値あるものであり、児童にたしかな学びを保障するものであった。教師たちは、児童のどのような発言や姿を引き出せばいいのかを、児童の学びの姿の中から具体的に求め、資質・能力との関係性を明らかにすることで、指示や学習活動を充実させていっ

た。これは、今求められている、コンピテンシー・ベースの授業づくりにおいて重要な視点を与えるものと考える。

一方で、「真正の学び」の七つのスタンダードのうち、残された三つのスタンダードを満たす学習単元を考えていくことで、さらに深い学びを実現する実践が可能となっていくと考えられる。これについては、今後の研究課題としたい。

表Ⅰ

問題解決能力		問題解決能力を育成するための具体的な手立て
事実や資料を解釈する力	・ 資料の信頼性を評価する ・ 資料内の関連を把握する。 ・ 資料の限界を認識する ・ 資料内から仮説や概括を引き出す	単元「役に立つ動物」（3年） 荷物を運んでいるいろいろな動物の図絵を何の説明もなく提示して考えさせるのではなく，牛と馬の役立ちからはどう違うかと対比的に資料を出している。
知識や原理を適用する力	・ 知識や原理を相互に関連づける。 ・ 学習問題と知識原理との関係の有無を弁別する。 ・ 結論や行動と知識原理とを論理的に関連づける。 ・ 異った文脈で学習した知識や原理を統一組織する。	単元「住まい」（3年） 「私の好きな家」を模型を創作した時，でき上がった作品の批評や説明では観賞的な質問のやりとりしかでてこなかった。そこで，「この模型をつくるまで」と変えることで，いろいろな材料や知識や経験をいかに関連づけたか，質問できるようになった。
証明を吟味したり評価する力	・ 証明を批判的に分析する。 ・ 結論が立脚している事実や根本を認知する。 ・ 仮説から結論への論理を見抜く。 ・ さらに新しいデータでその証明を修正する。	単元「住まい」（3年） 水でっぽうで水遊びをした際，よく飛んだものについて，穴と穴，筒と筒と対比させ，飛ぶものと飛ばないものの特徴をあげるように，観察する際に手順を示すようにしている。

（愛知学芸大学附属岡崎小学校『生活教育研究　第５集』p.78 及び、pp.93-94 をもとに、筆者作成）

資料Ⅱ

「役に立つ動物」（1950年）			問題解決能力（1953）年			
学習段階	展開	評価		事実や資料を解釈する力	知識や原理を適用する力	証明を吟味したり評価する力
導入	学校で飼っているあひるのスケッチ ・学校は何の為にあひるを飼っているのだろう 家庭で何か飼っているか調査 昨年度の児童の研究物を提示し，話し合う ・調べた内容について　・まとめ方の良否について　・不足している事柄について	あひるの羽毛などについての理解 動物を世話する態度 調査したものの整理の仕方	把握	・私達は，どうして家畜を飼うようになったのか推論する。 ・動物園，種畜場などの見学記を読み，問題をつかむ	・動物園や牧場はなぜあるのか話し合いをする。 ・それぞれの相違点を考えて比較する。	
計画	私たちも役に立つ動物について研究しよう ・前の反省に基づいて，どんな事を調べたいか，調べようか用紙に書き出す	問題の整理の仕方 図表の表し方	見通し	・資料の違いを比較し，利用を考える。 ・参考書以外の資料を集めるにはどうすればいいのか話し合う。	・どんなやり方がよいか調べ方を研究する ・順序・方法・分担の決め方。 ・材料を準備する。	・計画の適否について話し合い，検討する。 ・総合的に道筋の通った考え方をする。
作業活動	書籍による研究をする，自分たちの経験の範囲内で研究したものを表や図に表す ・仕事の手助けをする動物　・衣料の材料になる動物　・食用になる動物	本を読んで調べる態度	研究	・参考書・教科書を利用して，わかったこと，知っていたことを区別する。 ・資料を役立ち方に応じて分類して図表にする。 ★私たちは，動物をどのように利用しているか，農・山・村との違いを絵にかいたり話し合ったりする。	★役に立つ動物と役に立たぬ動物とどう違うか，その理由を引き出す。 ★いろいろな分類表を集めて，みんなで一番わかりやすいものを決める。（労役・衣料・食用・その他） ・なぜ，このように分類したのか，その理由を確かめる。	★繊維加工品を集めて，その中で役立つ動物から加工したものを分類して，今までの研究と合っているか調べたり，新事実の発見はないか，調査・研究はこれで十分か考える。
	種畜場の見学をしよう ●計画を立てる　・大体どういう所か先生の話を聞く ●見学　・見学した事を幻燈写真にとる　・種畜場のおじさんの話を聞く ●見学後の話合　・動物がいろいろの面で私達の役に立っていることの話し合う ・絵や文にまとめる	品種改良についての理解 人のお話を聞く態度 動物を可愛がる態度 感謝の意を表す態度				
	種鶏場の見学をしよう　●計画　●見学　●見学後の話合	にわとりについての理解				
	東山動物園の見学をしよう ●計画を立てる ●見学　・幻燈写真撮影 ●見学後の話し合い　・珍しい動物や愛玩用の動物，家畜について文を作る ・私達の調べた表や図絵と比較してみる パノラマの製作　3組に分けてつくる	動物の種類についての理解 動物の形態・習性についての理解 動物の習性と住む場所の理解 比較考案する態度 パノラマ制作の技術 作業中共同する態度				
	話し合いより発展して 人はどのよう様に動物を保護しているかの内容について話し合う ・禁猟禁漁増殖について　・金魚の改良　・豚の家畜化の様子 動物はどのようにして身を守るのか話し合う ・自然環境にあった形をし・・季節に色をかえる動物　・渡り鳥について 秋の虫を飼ってみる 人はどのようにして動物の害を防いでいるだろうか	動物は人のおかげを受けていることを理解する 動物は環境に順応していることの理解				
総括	出きた幻燈「東山動物園」，「種畜場と種鶏場」をうつして， 研究してきたあとをふりかえって見て楽しむ	幻燈をうつす技術	整理	★役立つ動物の絵や写真の画集をつくる。 ・発表・分類をしやすいようにする。	★調べた結果を発表する。 ・分類にはっきりした道筋が理解されているかどうか確かめる。	・画集や発表などで，総合的に批判する。

★は、「真正の学び」のスタンダード（学習課題）に合致する学習を表す。

【註】

(1) 本研究における「たしかな学び」とは、体験を重視した問題解決学習において、はいまわりにならず、学力を育成することができた学習と定義する。

(2) 金馬国晴「「はいまわらない」経験主義はありえたか：コア・カリキュラムの全体構造における＜単元＞と知識・技能の関係を手がかりに」日本教育方法学会『教育方法学研究 二九』、二〇〇四年、七三―八四頁

(3) 金馬国晴「戦後初期コア・カリキュラムの「形態」としての問題と可能性―「明石プラン」の改訂過程を手がかりに―」日本教育方法学会『教育方法学研究』第三二号、二〇〇六年、三七―四八頁

(4) 附属岡崎小学校と同じ西三河地域において研究の代表校であった岡崎市立六名小学校は、「地域社会学校の教育実践」を掲げ、実験学校として研究の成果をまとめた後も研究を継続させ、課題解決の学習単元の修正（一九五一年）や、音楽や図工などの情操学習（一九五二年）を充実させている。しかし、その後は、国語、算数、理科を中心とした学習指導（一九五四年）や、算数「文章題の指導」（一九六一年）のように、地域の課題を解決する社会科ではなく、国語や算数などへと研究の中心が移ってしまった。『第二集地域社会学校の教育実践』（一九五一年）、『第三集地域社会学校の教育実践』（一九五二年）、『第四集地域社会学校の教育実践　学習深化　その一』（一九五四年）、『地域社会学校の教育実践　第六集　文章題の指導』（一九六一年）参照。

(5) 田中耕治『指導要録の改訂と学力問題　学力評価論の直　面する課題』三学出版、二〇〇二年、七―八頁

(6) 文部省『学習指導要領一般編（試案）』日本書籍、一九四七年、三五頁

(7) 文部省『初等教育の原理』東洋館出版社、一九五一年、二一七―二一九頁

(8) 前掲書（5）一〇頁

(9) 天野正輝『教育評価史研究―教育実践における評価論の系譜―』東信堂、一九九三年、二八五頁

(10) 同上書、二六八頁

(11) 大村栄・久保田浩・馬場四郎「単元指導法Ⅻ　単元学習における評価」『カリキュラム』誠文堂新光社、一九五二年、四〇―四三頁

(12) 前掲書（9）、二七七頁

(13) 毎年の研究発表会では、森田清（愛知学芸大学教授）「教育評価」、武政太郎（文学博士）「教育評価の問題をめぐって」（一九五二年）、伊藤四三九（附属岡崎小学校・学校長）教育評価の重要性」などの講演（一九五三年）

が組まれており、当時の教師たちにとって、評価は大きな問題になっていたと言える

(14) 坂井誠亮『戦後小学校社会科における学習評価に関する史的研究―奈良の社会科を事例として―』ＤＴＰ出版、二〇一四年

(15) 林尚示「千葉県北条プランにおける能力評価の変遷に関する研究―コア・カリキュラムの構造変遷との関連に注目して―」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究　第六号』、一九九七年、一三―二六頁

(16) 来山裕「社会科における評価の研究―初期学習指導要領における評価―」全国社会科教育学会『社会科研究』第36号、一九八八年、五七―七一頁

(17) 前掲書（14）、一〇―二〇頁

(18) 同上書、二八頁

(19) 前掲書（16）、五七―七一頁

(20) 来山裕「社会科における評価の史的研究―初期社会科実践における評価―」中国四国教育学会『教育学研究　第三三巻』一九八八年、二一四―二一九頁

(21) 愛知教育大学附属岡崎小学校同窓会『愛知教育大学附属岡崎小学校　八〇年の歩み』、一九八一年、一一六頁

(22) 愛知学芸大学愛知第二師範学校附属小学校『生活学校の姿』、一九四九年、一三八頁

(23) 前掲書（21）、一一四頁 一九四八年の校舎平面図を参照。

(24) 松本義弘「生活単元学習の深化」愛知学芸大学愛知第二師範学校附属小学校『第三回生活教育研究協議会　生活教育研究　第三集』一九五〇年、一―三頁

(25) 同上書、一―一九頁

(26) 田中総一「現場学習の構造と児童の発達」愛知学芸大学愛知第二師範学校附属小学校『第五回生活教育研究協議会　生活教育研究　第五集』一九五二年、一頁

(27) 附属岡崎小学校では、一九四九年の『生活学校の姿』において終戦後の研究の成果をまとめ、カリキュラムの構成を「生活単元指導計画」を中心に、「基礎練習指導計画」、「余暇指導計画」、「体育指導計画」としている。

(28) 高橋豊平「生活単元学習革新の拠点―問題解決学習を効果的に指導するために―」『生活教育研究協議会　生活教育研究七』一九五四年、七八頁

(29) フレッド・M・ニューマン　渡部竜也・堀田諭訳『真正の学び／学力―質の高い知をめぐる学校再建―』春風社、二〇一七年、三五頁

(30) 草原和博「『真正の学び／学力―質の高い知をめぐる

学校再建―』の方法論的検討」フレッド・M・ニューマン　渡部竜也・堀田諭訳『真正の学び／学力―質の高い知をめぐる学校再建―』春風社、二〇一七年、四九三―四九六頁

(31) 卜部匡司「「真正の学び」を創造する学校とは―「今日儒学の五類型論」を手がかりに考える―」広島大学附属小学校『学校教育』、二〇二三年、一四二一五頁

(32) 前掲書（29）三九頁
ニューマンは、従来の学びは、三つの基準のうち、どれかが高く扱われ、どれかが低く扱われていたと指摘する。また、教室での全ての活動が三つの基準にいかなるときも合致することを期待しているわけではない。

(33) 前掲書（29）、四一頁

(34) 前掲書（28）、一〇三頁